

配置薬に使用される生薬の特徴③

村上 守一

ケイヒ(桂皮) *Cinnamomum cassia* Blume. (クスノキ科 *Lauraceae*)

香辛料または薬用に、古来より重要な植物として取り扱われてきました。中国においては『神農本草経』（漢代）に菌桂、牡桂の名で収められ、『傷寒論』（漢代）等には桂枝、桂心の名で、『本草綱目』（1590）では牡桂すなわち肉桂であると記載されています。現在輸入されているものは中国からは広南桂皮、東興桂皮で原植物はケイ (*C. cassia*) であるとされ、品質によって「官桂」、「企辺桂」、「板桂」、「桂心」、「桂碎」等に分けられています。ベトナム桂皮も輸入され、原植物は *C. obtusifolium* ともいわれていますがケイも産出されるところから局方では *C. cassia* として扱っています。

日本では『正倉院種々薬帳』に「桂心五百六十斤 并袋」と記載され、何度か出蔵されている記録もあり、古くから渡来していたことが分かります。昭和 23・24 年に行われた科学的調査では *C. cassia* かまたは *C. obtusifolium* であることが確認されました。

古代エジプトの医学書『エバース古典』（前 1550）に「テュ・シェペセ」（tesps シナモン）を処方した薬物が数点記載され、またギリシアの歴史家によるとミイラ作りの際、防腐と悪臭消しのため腹の中に詰められたり、布に香料として塗ったことが記録されています。1 世紀頃のリオスコリデスの『ギリシア本草』にも「Kassia」、「Kinnamom」の 2 種が記載されています。おそらくアラビアを経てインドよりもたらされたものと考えられています。

現在、薬として用いられている種は前出の 2 種ですが、世界では香辛料等に多くのクスノキ属植物の樹皮が使われています。セイロン桂皮 (*C. zeylanicum*) は柔らかい芳香と甘味があり香辛料に適しています。その他、タイ桂皮 (*C. iners*)、台湾桂皮 (*C. pseudo-loureirii*)、ジャワ桂皮 (*C. burmanni*)、ボルネオ桂皮 (*C. cilawan*) 等があります。また、日本で栽培されていたニッケイ (*C. sieboldii*) は根皮を利用しますが、和歌山県の山中で栽培されている根皮を味わってみたところ、独特の芳香と辛味とともに非常に甘かった記憶があります。おそらく京都のお菓子「八ツ橋」の原料ではないかと思われます。

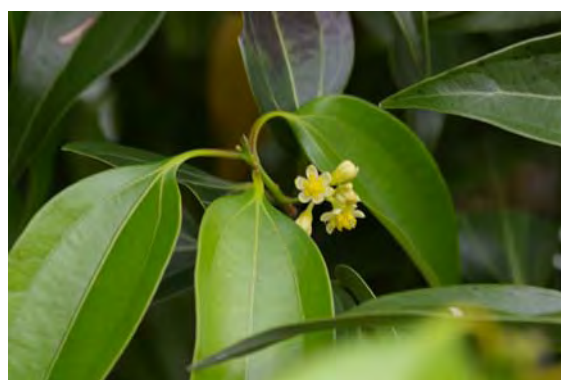
植物の特徴

中国南部、インドシナ原産の高さ 12~17m になる常緑高木で樹皮は灰色、葉は長楕円形全縁で表面は濃緑色で光沢があり、裏面は帯白色を帯びます。花は円錐花序で 5 月に腋生または頂生し、淡黄色の小花を多数つけます。耐寒温度は 6~8°C で日本では屋外で育ちませ

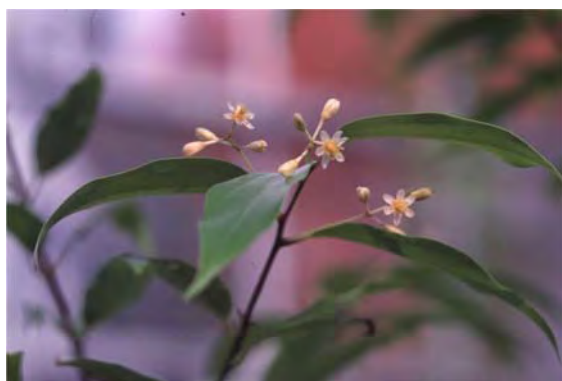
ん。



ケイ



ニッケイ



ジャワニッケイ

生 薬

樹皮を剥ぎ取りそのまま乾燥するかまたは、周皮の一部を除いて乾燥したものです。半管状または巻き込んだ管状で、断面が紫紅色、油性が高く、香りが強く、味が甘く、かすかに辛く、渋味がないものを良品とします。他に桂枝(若枝)、桂丁(若い果実)も薬用に用います。



桂皮

成 分

精油（1～3%含有）：ケイヒアルデヒド、酢酸シンナミル、シネオール等。他にタンニン等を含みます。

薬効および使用法

気の上衝、発表作用があり駆風、発汗、解熱鎮痛薬として頭痛、発熱、感冒、身体痠痛、のぼせ等を目的に安中散、葛根湯、桂枝湯、小青竜湯、八味地黄丸等多くの漢方処方に配合されます。